

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第119回 (2019.02.01) の要旨

拝読文(『真宗聖典』64～65頁)

仏、弥勒菩薩に告げたまわく、「汝が言えること是なり。もし仏を慈敬することあらば実に大善なりとす。天下に久久にして乃ちまた仏まします。今我この世において仏と作りて、経法を演説し道教を宣布す。もろもろの疑網を断ち、愛欲の本を抜き、衆悪の源を杜ぐ。三界に遊歩するに拘碍するところなし。典攬の智慧、衆道の要なり。綱維を執持して昭然分明なり。五趣を開示し未度の者を度す。生死泥洹の道を決正したまう。弥勒、当に知るべし。汝、無数劫よりこのかた菩薩の行を修して衆生を度せんと欲う。それすでに久しく遠し。汝に従いて道を得て泥洹に至るもの称数すべからず。汝および十方の諸天人民、一切の四衆、永劫よりこのかた五道に展転して、憂畏勤苦具さに言うべからず。乃至今世まで生死絶えず。仏と相値うて経法を聴受し、またまた無量寿仏を聞くことを得たり。快きかな、甚だ善し。吾、爾を助けて喜ぶ。

『無量寿経』が呼びかけている衆生というのは、親鸞という人がしっかりと見極めましたように、五濁悪世という問題があります。この五濁にいる人間存在とは、ここまで『無量寿経』で描かれてきたように、愚痴を根拠にして、瞋りや腹立ちに突き動かされてお互いに幸せを求めたつもりで生きていながらなかなかそうはなれないのが五濁にいる人間存在。自分自身がそういう苦悩を引く在り方であるのみではなくて、一緒に生きている存在がみなお互いにそういう苦悩をかぶせ合うと言いますか、お互いに自利他利どころではなくて、自障障他、互いに傷つけ合う。自害害彼、お互いに害し合う。そういう命を生きるしかないという見極め。これが親鸞聖人が見極めた凡夫という我々なのです。これが『無量寿経』で説かれる、阿弥陀仏が本願を起こしてござるを得ない人間存在の深みなのだと思うのです。

愚かな人生を、本当に愚痴極まりなき人生を心暗く、憂鬱な思いで生きて死んでいってしまうのだと。『無量寿経』はこういうことを繰り返して教えて下さっていて、その中に「今仏に値う」という事件が起こるのだと。『無量寿経』の本願を開いて、そして十方衆生もみなこの本願の光に遇わざるはない。みなこの光のもとに必ず明るい命を生きていけるようになる。それは決して凡夫でなくなって明るくなる、のではない。凡夫であるということと矛盾せずに、凡夫であるということが何の妨げもなしに明るい人生を獲得できるのだという教えが、この仏に値うということによって言われている。この仏に値うということの「仏」とは、『無量寿経』の教主世尊のことですが、『無量寿経』の教主世尊は、本願を説くためにこの世に現れて下さったのだというのが親鸞聖人のご理解です。苦悩を離れてどこか遠い架空の浄土に往って救われる、というのではない、苦悩の命と矛盾せずに救いがあるということをここで教えて下さっているのだと思うのです。

その方法と言いますか、その苦悩の命を離れる道ということが、本願の中に繰り返して確認される。仏の御名を聞くということと、仏の光に遇うということ。この二つの在り方です。ただそれを我々は信受すればよい、信じて受け止めればよいという仏法。これがなかなか信じ難い。我々からすると難信、極難信である。極めて信ずることが難しい。

疑いというのは、実は人間の理性のはたらきと言ってもよいわけですがけれども、これが人間独自のと言いますか、人間の心理作用の賢さが引いてくる煩惱と言ってもよいかも知れません。それが結局いまのいわゆる文明とか、科学とかいうものを進展させてきた。ある意味では、大切な作用もしてきたのですけれども、仏教では精神的な根本問題の一つとして、疑いは煩惱だと。こう言うのです。特にこの疑い

は、仏陀が教えようとする教えの方向性、あるいは教えようとする言葉の内容について人間がそれを明白に正しいことと了解しない。「どうなんだろう」という形でしか、仏陀の教えに対応しない。そういう問題を疑いという言葉で言います。

そこで『無量寿経』では、人間存在を根本で苦しめる「疑網を断」つと。疑いを断つということです。そして続けて、「愛欲の本を抜き」と。愛やら、欲やらというものの本を抜くと。仏陀がこうした苦悩の本を抜く課題として自力で修行した時の在り方があるわけですが、努力してそういうことをやろうとしたけれども、実際はそれでは仏陀はたすからなかったわけです。でも、一応ここではそういう方向性で仏陀を讃えて、そして「三界に遊歩するに拘碍するところなし」と。仏陀自身はある意味で自由を獲得しましたから、自在ですね、自分自身が自分であるままに生きていけるという世界を獲得しました。その自在のままに三界、つまり欲界・色界・無色界と言われる三つの世界、この三界が人間経験のすべてですが、人間経験のすべてを遊ぶが如くに歩むと。

「遊び」というのも、我々は遊びに出かけたりはするけれど、本当に遊ぶということが容易ではないのです。出来ない。遊びというけれど何か疲れてしまったり、飽きてしまったりする。仕事であればその仕事の為にすべてのエネルギーと時間を使って、そしてそれなりの報酬を得るということがある。これが仕事になるわけですが、遊びは報酬の為にやるのではなくて、自分が楽しむ為に何かをするわけです。自分が楽しむ為にする時に、楽しみが十分に自分のものにならないという問題が遊べないという問題になるのです。遊んでいながら遊べない。

仏陀はあたかも遊ぶが如くに、と言いますが、「如くに」とは凡夫の側からしてそう言うのですけれど、仏陀自身は本当に遊んでいるのです。自由に生きている。それを遊びと言う。我々はなかなか遊ぶが如くに、と言いますか、遊ぶことが出来ないわけです。何か配慮がどうしてもはたらいってしまう。それは凡夫だから仕方がない。凡夫の限界だと思います。人間的理性の、疑いのなせる業だと言ってもいいかもしれませんね。

仏陀は、「拘碍するところなし」と。こだわりがない。障りがない。遊んで自在に生きている。けれども、現実にはそうはいかない問題が山積している、と凡夫はすぐにそう思ってしまう。しかし、そういうことに対して仏陀が関わる時には、関わる態度に自我が入っていないということなのです。自我が入ってそれに関われば、現実の様々な状況にやはり引き込まれて迷わされて苦しめられる。そういう障りやらが無いと。

次に、「典攬の智慧、衆道の要なり」。典攬の智慧ということは、書物を持って歩いているという意味ではなくて、書物の如き智慧が身についているということです。私は、親鸞聖人もおそらくそういう方だったのだらうとつくづく思うのです。一度読んだら忘れないと言いますか。親鸞という方は何度も読む。何度も読んだらびっちらと目に張り付いて忘れない。

関東から京都に戻られる直前の高熱が起こったときの事件、これを恵信尼公が書いておられますけれど、熱でうなっておられる時に、恵信尼公が「大丈夫ですか」と声をかけた。そうしたら、がばっと起き上がったのでしょね。自分は熱にうなされている中で、『無量寿経』の文字が出てきて、お経を読んできました。お経を読むことが絶え間なかった。時間があかないくらい経典を読んでいて、そこでふと気がついたという話ですね。親鸞聖人はこの経験を反省材料として、自力の執念と言いますか、自力の妄念が断ち難い身なのだということを気づかせる為に起こったのがこの思いなのであると。それを恵信尼公に伝えたのだとあります。恵信尼公はそのことを自分の娘、覚信尼公に手紙で書いておられます。これはそもそも『無量寿経』の言葉が身につけていなければならないことですよ。

さてこの後に、「五趣を開示し未度の者を度す」とありますが、「五趣」というのは、「趣」は状況です。「六趣」とも言われますが、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天のことで、六道とも言われます。地獄・餓鬼・畜生・人・天、これが五道、五趣で修羅が抜けている。修羅を入れると六道、六趣です。五趣というのは迷いの命を表しているわけです。無明の命を表している。「五趣を開示し」、無明の命を、無明の命に迷わされている在り方を開き示すと。「未度の者を度す」、まだ渡ってないもの、まだそのことが本当に開かれていないものを開くのだと。「度」という字は、「渡す」という意味をもっていて、迷いの命から彼岸の岸へ、ニルバーナ (nirvāṇa) の岸へ、さとりの世界へ渡すと。渡すという形で教えが立てられている。それを度と言うのです。未度の者を渡すと。

そして「生死泥洹の道を決正したまう」。生死というのは迷いの命、六道とか、五趣と言われるような在り方を生死とも言う。「泥洹」は、これは涅槃ですから、涅槃という形でさとりの世界と言いますか、菩提を開いた内容を涅槃という形で言うのですけれど、大乘仏教にくるとその涅槃は、生死と別ではないと。生死を離れて涅槃がどこにあるのではない。「生死即涅槃」だと。生死は迷っている世界で、その迷っている世界を超えたり、離れたりという表現があるのですけれど、実はそれは無明の命で見ているから迷っているなのであって、それ自身は迷っているわけではない。それ自身を本当に見ればそれが涅槃なのだ。こういう大乘仏教の智慧が教えられていて、『無量寿経』は大乘経典ですから、生死・涅槃、これは別ではない。不二不異であると。一ではないけれども、二でもない。同じでもないけれども、別でもない。分からないですねこれは。我々からすると分からない。迷っている立場、生死の立場からは、涅槃は分からないわけですから分からないのは当然です。でも、本当は仏陀の眼から見れば生死のほかに涅槃があるのではないのだと。これが大乘仏教ですから、そういう「生死泥洹の道を決正」というのは、生死と泥洹（涅槃）の境目をハッキリと見極める智慧という意味で、その智慧がここで言う道でしょう。「決正」ということは、生死と泥洹というものをしっかりと見極めると言いますか、そういうことを表すのだと思います。

「弥勒、当に知るべし。汝、無数劫よりこのかた菩薩の行を修して衆生を度せんと欲う」。弥勒という人は伝説的な存在なのですが、実在の人物ではない。この弥勒は、大乘経典に現れる弥勒は、法蔵菩薩と同じで物語上の人物的な形で表された大乘の願いです。その大乘の願いで表された弥勒という名の菩薩の在り方は、「無数劫よりこのかた菩薩の行を修して」、無数劫、数えることの出来ない昔から菩薩の行を修して、そして未来劫に亘って、五十六億七千万年後までということが数字として言われますけれど、とにかく過去から未来へずっと衆生を度せんとして衆生が尽きるまで修行をし続けると。こういう物語ですね。

苦悩の衆生と共に、苦悩の衆生が本当に一人も残されることなくたすかるように最後の衆生と共に成仏すると。こういう物語上の人物です。それをここでも言うわけです。「菩薩の行を修して衆生を度せんと欲う」と。そして、「それすでに久しく遠し。汝に従いて道を得て泥洹に至るもの称数すべからず」。あなたに従って行ってさとりを得て涅槃に至る。そういうものは、数えることが出来ない。

「汝および十方の諸天人民、一切の四衆、永劫よりこのかた五道に展転して、憂畏勤苦具さに言うべからず」。あなた自身も、そして十方の諸天人民、一切の四衆、この四衆というのは、仏弟子の在り方を四衆と言うのです。出家者の男性・女性、在家者の男性・女性、それをそれぞれ比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷と言いまして、これを四衆と言うのです。そういう仏教に帰依してきた人々ということになります。十方の諸天人民は、仏教以外のあらゆる一切衆生を包んでいるのですけれど、その中から一切の四

衆と。この人たちは「永劫よりこのかた五道に展転して、憂畏勤苦具さに言うべからず」と。永劫、つまり無限の背景から今に至るまで、流転輪廻して来たと。「憂畏勤苦」の憂はうれいです。畏はおそれです。この憂いが迷いの命を覆っているし、畏というのいろいろな数えられます。『華嚴経』などでは、五つの畏れということが言われる。その一番初めの筆頭の畏れは、死の畏れ。死の畏れに始まって、死後の畏れや、生活が成り立たないのではないかとという畏れもあるし、人から悪く言われるのではないかとという畏れもある。悪名の畏れとか、不活の畏れとか、いろいろある。そういうものを数えて五つの畏れと言うのです。

次の言葉が大変よい言葉なのですが、「仏と相値うて経法を聴受し、またまた無量寿仏を聞くことを得たり」。これも前の段にあったのと同じようなことを言うわけですが、絶えない生死、生死の真ただ中で仏と相値うて経法を聴くと。「またまた無量寿仏を聞くことを得たり」、この「またまた」は、経文の漢字で見てくださいと「又復」とあり、違う漢字が重なっているのを仮名で「またまた」と真宗聖典の書き下しでは書いています。この上の方の「又」は、もう一度という意味ですし、「復」という字は重ねてと言いますか、一遍聴いたことを復習するとか、復誦するという言い方がありますがけれど、もう一度ということです。文字を重ねて「またまた」。こういうところに、経法を聴いて、また聴いてということがある。そして聞くことを得る、無量寿仏を聞くことを得ると。

「無量寿仏を聞く」というのは、無量寿仏の名を聞くのですが、無量寿仏という仏陀がどこかに居るのではなくて、仏陀は「名として在る」わけです。名として在る仏陀、それは本願の名である。本願が衆生を目覚ます為に名となっている。その名を聞くと。こういうことで、「無量寿仏を聞く」と。だから無量寿仏を聞くということは、無量寿仏を見るときも言われる。見るのも目で見るのではない。見るという字は「あう」という意味ももっていますから、仏の願いに値うということが、無量寿仏を見るときという言葉で言われるのです。

そういう形で現に起こる、解明される、開かれて明るくなるという事実は、私が凡夫であり迷いの命であり、苦悩の命であるということと矛盾せずにこの私に大悲の本願がはたらいているのだということに気づくという形で値う。凡夫であることから足を洗うことが出来るわけではない。凡夫であるのは、どっぷりと泥田の中にいるということ。そのこととこの本願の教えに値うということとは、何も矛盾しない。これは不思議なことなのですね。

我々は、俗世を止めて宗教へ、というように考えてしまう。そういう形の宗教は、親鸞聖人は自分はいらないと。この末法濁世を凡夫として生きる、その為にいま本願をいただくのだと。だから、「非僧非俗」という宣言をなさった。つまり、私は僧侶になるのでもない、単に世俗に埋没するのでもない。けれども、仏弟子である道を行くのだと。これが本願の仏法に値ったということです。凡夫として、本願に依って仏弟子で在る道なのです。

こういう道を発見した。ここに親鸞聖人の喜びがあったわけです。

文責：中村 玲太（親鸞仏教センター嘱託研究員）